

子どもの理解を深めるために

—メラニー・クラインの著書を読んで—

清原 規子

今年、タビストッククリニック（ロンドン）のコースで、メラニー・クラインの理論を学ぶ授業に参加している。この授業から、彼女が、子どもの治療や観察を通して、子どもの心の世界（特に感情的なもの）をできうる限り全人格的に理解していることとされているのを大変興味深く勉強している。今まで学んできた中で私が特に印象深く思ったことを私なりにまとめてみようと思う。

メラニー・クラインのこと

彼女は、一八八二年にウィーンでユダヤ人の夫婦の四人目の子どもとして誕生した。結核の強い家族の中で育つ一方、すぐ上の姉を彼女が四歳の時に、父親を十八歳の時に、そして長兄も二十歳の時に亡くしている。彼女は二十一歳で結婚して三人の子どもをもうけたが、その間ひどく落ち込んで苦しんだ

りもしていた。そんな時に、フロイトが構築した精神分析を知り、学び始めた。彼女は、特に子どもに興味を持ち、直接子どもの治療に重点的に関わるようになった。

クラインの子どもの世界の理解

まず彼女は、子どもは生まれたその時から自分を愛してくれる対象を求めている、ということを書いている。乳幼児はとても繊細で、壊れやすい存在なので愛情を持って世話をしてくれる人が必要であると、いろいろな所で述べている。では、乳幼児はどんなふう繊細なのか。

ここで少し、エスタービックという人が述べたことを付け加えておきたい。というのは、このあと述べようとしていることは、そこから繋がっていくものと思われるからである。彼女は生まれたばかりの赤ん坊は、言葉どおりにしっかりと抱かれる経験の大

切さを述べている。乳児は、本当に薄いガラスが簡単に割れてしまうようなもろさを持っていて、でもそれらが丸ごと一緒に抱かれることによって、自分を守られている、愛されているという実感の体験を自分の中に取り入れることができ、次第に自分という一つの形を作っていく、それがこの後のクラインの発達へと繋がっていくと示唆している。

クラインは、乳幼児はまずいろんな体験をシンブルに、自分を守ってくれるとてもいいもの（人）と自分に危害やストレスを与えるとても悪いもの（人）に分けていると考えている。それは同じ人や事柄から出てきたものでも、初めの頃は、別のものとしてとらえている。そして次第に、同じ人からその両方の部分が出てきていることを知るようになる。

乳幼児は、生まれた時からこの悪いものに対して、既にいろいろな不安や恐れを持っている。乳幼

児の心の中では、一つ一つの出来事が自分の命を失うか、生き残ることができるかというほどの一大事なことで、この不安もその心の動きにそって非常に大きなものとなっている。それ自体は自分を守る力を育てていくのに必要なものもあるわけだが、その不安や恐れは、この同じ人からいい部分も悪い部分も出ていっていると気づき始めた頃には、大きく分けて次の二つに分けることができるという。

一つ目は、この世の中でとてつもなく悪い者が、自分をやっつけ、破壊しようとしているという不安である。この不安に対しては、自分も同じくらい力を持って、相手をやっつけなければならぬという「目には目を」という気持ちで対抗していこうとする。

二つ目は、前の不安とそれに対抗する「目には目を」の手段に繋がっているものでもあるが、自分の愛している人（この頃は多くの場合は母親あるいは

自分の世話をしてくれる人がその対象となると思われるが）を失ってしまうのではないか、悪い者のせいであるいは自分のせいだ、という恐れ、あるいは傷つけてしまったという悲しみである。つまり、現実にはその愛する人は存在するのだけれど、乳幼児の心の中では、そのようなファンタジーが、自分のパワフルな力によってあたかも現実に体験したかのように存在するのである。そして、自分の感情の大きさによって、何度も危機的な状態になっている。

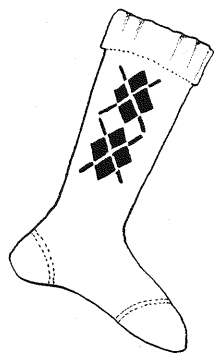
ここで、クラインは再び、この不安は子どもにとって耐え難いくらい大きなものであるからこそ、実際に愛する人が傍にいることの重要性を述べ、そして、この不安に対して、では子ども自身はどういうに対処していこうとしているかを述べている。

子どもの心のファンタジー

これらの不安が生じてくる時期は、子どもをとて

も不安定な状態に置く一方で、愛する人の助けを借りながらそれに対処する方法を心の中で育て上げていく時期で、このバランス及び、ここをうまく乗り越えていくことが子どもの心の成長に大切なものとなっている。

子どもが愛する人を失ってしまったのではないかという不安と、あるいはその思いに引き続いて、自分としてしまったことに対する自責の念がわきおこつてくると子どもはそれに対抗して、心の中の愛する人を守るため、よみがえらせるために（それは結果的に自分自身を守ることになるわけだが）、いろいろ



るな経験（体験）をしている。特に、子どもはそれらと面と向かっていくだけの力を十分には持ち合わせていないので、いろんな方法を使って、そこを乗り越えていこうとする。

たとえば、愛する人を失ってしまったことに対するの悲しみとそれに対する自責の念に面と向かうのを避けるため、「ふん、別になんとも思わないよ」とか「そんなもの関係ないや」と振舞う時もある。ば、ファンタジーの中で自分がすごく強い人になって、敵をやっつけたり、自分に従うように相手を仕向けさせるように振舞う時もある。また、愛している人を守るために、その人を完全無敵な正義の味方に仕立て上げたりもする。絵本やアニメなどは、これらを表現しているものが多いのは誰もが思いつくことである。

これらの子どものファンタジーの背景には、自分の中には大好きと思う気持ちと大嫌いという気持ち

ち、ほっとできるという気持ちと危ないと思う気持ち、攻撃するという気持ちと悪いことをしたから償いたいという気持ち等をたくさん経験していく中で、それらを一緒に体験してくれる、たとえば母親の存在によつて、自分の生きていく価値の大切さを見出し、つまり、母親が自分を愛してくれたように自分もそんな「愛する」気持ち、よい部分を持つているんだという、人に対しても自分に対しても信頼できる気持ちを構築していくものがあるという。

クラインはこの時期をとても大切なものと考えている。特に、子どもたちが人との関係の中で、自分の中にいろいろな気持ち―それはたとえば、一方で喜ぶ気持ち、他方では怒る気持ち―があることに気づき、そこを支えてくれる人とともに知っていく、前述したように、信頼する気持ちを子どもが育てることができるか、あるいは自分は見捨てられた歓迎されない存在だと絶望感と大きな怒りに浸ってしま

うかを基本的に築く時期だからである。

最後に

彼女の著書では、人間のさまざまな感情をいい面悪い面等、一つ方向からだけでなく、多方面から見ている。読んでいて、かつ、どこまでも追求していつている。読んでいて、乳幼児から始まる人間の心は（もつと言えば胎児の状態からともいえよう）、これほどまでに広く深いものかと、子どもを相手に仕事をしながら実感するばかりである。

（ロンドン在住）

参考文献

『メラニー・クライン著作集3』（誠信書房 一九八三）
第6章 「喪とその躁うつ状態との関係」